

企業名：兼松株式会社

レポート名：統合報告書 2022

1. この会社が目指している将来の姿が理解できるか

株式会社兼松はその企業理念として、創業者兼松房治郎の言葉でもある、「わが国の福利を増進するの分子を播種栽培す」を掲げている。兼松の源流となった企業はオーストラリアからの羊毛輸入からその事業を始め、その後時代と生活の変化とともに繊維、鉄鋼、機械、食料、エネルギー、電子など、幅広い分野を取り扱う総合商社へと成長を遂げた。また、社会貢献活動も重視しており、その活動のひとつとして一橋大学の兼松講堂を寄贈したのも兼松株式会社である。

兼松はその中期ビジョンとして創業 135 周年を迎える 2024 年 3 月期までの達成目標である「future 135」を掲げている。新型コロナウイルスの拡大によって目標の見直しが多少行われたものの、おおむねその定量目標と、様々な事業への投資を通して持続可能な世界経済成長の実現と社会的課題の解決に貢献するという基本方針は十分に理解出来るものである。また、この中期ビジョンのその先の姿では、DX や GX、イノベーションなどをキーワードにグループ会社の英知を結集して兼松が商社として飛躍的な成長を遂げることを目指していることが、この統合報告書 2022 からわかる。

2. この会社の現在の競争優位性が理解できるか

兼松はその統合報告書 2022 において、自社の強みとして、「商いで培われた強固な顧客基盤とビジネスノウハウ」、「安定した財務基盤と収益構造」、「資本効率性重視の経営力」、「事業創造にチャレンジする人材と促進する投資制度」という 4 つを挙げている。これらの強みは 100 年を超える伝統が基盤となった強みである。特に 2 つ目の強みについて、兼松は特に世界情勢の影響を受けやすい化石燃料や不動産、金融などへの投資をほとんど行っておらず、コロナ禍において受けた影響もほかの企業より比較的軽微であった。このような収益構造が軸となって、兼松の安定経営を支えているといえ、その競争優位性もこの統合報告書から十分理解できる。

3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか

前項で上げた 4 つの強みはどれも兼松が伝統的に強みとしてきたもので、かつ今後も引き継いでいくべきものである。兼松の事業形態に深く根付いたものであるといえ、これらの競争優位性を持続させることは十分に可能であると考えられる。ただし、兼松の前身となった豪州貿易兼松房治郎商店の 1889 年の創業当時とは当然世界の様相は大きく変化しているし、扱うビジネスの内容も変化している。その意味では、伝統的なこれらの強みに依存するだけでなく、今後は新たな強みも確立してビジネスを進めていくべきだと考える。とはいえ、

基本的には前項で説明したような兼松の競争優位性に持続性があると考えられるし、そう理解できる。

4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

兼松は 2022 年度新卒採用社員の半分以上を女性としており、外国籍社員も増えているという。統合報告書に登場する役員たちのほとんどが男性であることは気になるものの、社内の多様性は進んでおり、兼松で様々な多様性を持つ人々ともに働くことで自己に生かせる機会はたくさん得られるように思われる。また、2019 年より新設された研修制度である「兼松ユニバーシティ」では、経営を基礎から学び、いわゆる商社マンとしての人格形成までに至る教育プログラムを受けることができる。また、社員それぞれが情熱を注げるような事業を担当できるような人事制度も整備されつつあり、このような教育プログラムや多様性豊かな社内で働くことで、会社への貢献と同時に自己の人的資本価値を向上させることは十分に期待できると考えられる。

5. 報告書のよかった点はどこか、どのような改善余地があるか

兼松株式会社の統合報告書 2022 は全体的に写真や図が効果的に使われていて、またカラーリングなども工夫されていると感じ、全体的にとても読みやすかった。ただ、改善点をあえて挙げるとすれば、各項目の説明が若干冗長に感じ、同じことを何度も説明しているのではと感じる点はいくつかあった。ページ数も約 90 ページと決して少なくはない。統合報告書自体が主に機関投資家に向けたものであるということは理解しているが、一人の浅学の学生としては、もう少し簡潔な説明だとよりわかりやすいものになると思った。